
とある侍の一方通行～江戸編～

スペディオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある侍の一方通行〜江戸編〜

【Nコード】

N9870W

【作者名】

スペディオ

【あらすじ】

銀時が学園都市最強の一方通行アクセラレータになってから十数年、異世界「とある魔術の禁書目録」

でまた新たな大切なものを見つけたし、過ごしている。

そんなある日、学園都市から銀時、麦野、垣根の姿が突然と消えた。

消えた場所は……

「超能力」と「侍」が交差するとき、物語は始まる。

この銀時はチョーカーがついてません

あと一方通行要素が強くなっている予定です

1、悪党は悪党でも性質は違う（前書き）

我慢ならずに書いてしまいました。

更新は

『とある侍の一方通行』と『晋魂』より遅いです。

1、悪党は悪党でも性質は違う

茶髪でホスト風を感じさせる少年はふと目を覚ます。

その風景に違和感を感じたのは真っ先に見えた夜空に浮かぶ満月が見えた。

それで漸く覚醒した。

それに一人じゃないことにも気づいた。

ガチャリと二丁拳銃をこちらに向けた妙な服を着た金髪の女がいた。自分を囲むかのように着物を着た連中が集まり、刀に手をかけている。

「貴様、何者っスか!？」

銃を向けたまま女は警戒している。

「はぁ？」

寝ていたのか、上体を起こして意味不明な状況に困惑する。

それに

「舟が空を飛んでるだど……?」

おかしい光景にますます理解ができない。

（ここどこなんだよ？学園都市じゃ…ねえな。こんな連中見たことねえし）

まずは聞くことにした。

「ここどこなんだよ？テメエらは一体何なんだ」

単純に聞いたただけなのだが、聞く耳は持たないらしい。

「どこの馬の骨かもわからない奴に教える筋合いはないっスー！」

話して貰える様子はないのに呆れた顔する。

「ったくよ……何がなんだかさっぱりだよ畜生。どうしろってんだよ」

げんなりとしていると更に誰かがやってくる。

そして興味深々に少年を見る。

「ほお……妙な服装はしているが、我々と同じ血の臭いがするな」

サングラスにツンツンした髪をして背中には三味線をした男は少年を見てはつきりと言った。

少年は驚かない。

この男からもそして周りにいる連中も同じ臭いがしたからだ。

「フン……んなもん、その手で何度も見てきたよ」

フツと鼻で笑う。

「ここは、江戸。我々は鬼兵隊という、言わば世界に喧嘩を売った反乱分子ってところござるか」

男が急に場所と、自分達の素性を軽く話したのに眉を寄せる。

（江戸だあ？……………オイオイそれにしてもそんな時代に空飛ぶ舟とか開発できるような愉快なところじゃねーだろ。まさか、異世界ってー馬鹿げたところに着たのか俺は）

（歴史とは掛け離れた別の世界によ）

少年にとって江戸時代なんてのはもう200年以上も前の話だ。それにこんな開発的な時代じゃなかったことも知っている。それとは別の世界。もう一つの江戸が存在することになる。

「平行世界なんてどこの漫画なんだよ……………」

ボソリと呟く。

しかし、歴史と一つ同じものがあつた。

「お前らはもしかして『侍』って奴なのか？」

「そつだ」

男が答えると、すくつと立ち上がる。

連中は警戒したままギロリと睨んでいる。

「わかった所で別に何もしねえよ」

めんどくさそうな顔で見渡して頭をかく。

「貴様の素性を話してもらおうか」

男はやはり聞いてきた。自分が何者なにかを。

「俺はただのよそ者さ。……しいていうならデメエらとは別の世界から来た」

直に言い過ぎたかと思ったが、信じてもらえる策はある。今のところ全員馬鹿にしたような顔している。

少年はそのまま話を続ける。

「そんな顔するのは当然だな……『超能力』って知ってるか？」

「たとえば」

バサアアアア！！！

背中に白い6枚の翼が出現した。

「簡単に言えば、普通の人間が持たない異能の力」

サングラスの男と金髪の女以外に少年を見た連中は驚愕し、混乱して刀を抜こうとしていたが

ゴッ！！

「!？」

全く動けなく、刀を抜く動作で止まった。

「……何をしたんすか？」

動けない体でギロリと鋭い目で睨みつける金髪の女。

「てめえらの動作を逆算して俺の能力、この世に存在しない素粒子を造りだしてそれを重力として動きを止めたただけだ」

どう言う原理かを説明して少年はニヤリと笑う。

「これでわかってくれたか？」

「……あまんと天人ではないのか」

「その天人っていうのが何だか知らねえが、俺は人間だ」

男が何を言っているのかわからないがとりあえず否定した。

「つまりあれだ」

「これが俺に身につけてる超能力『ダークマター未元物質』。異物の混じった空間、ここはてめえらの知る場所じゃねえってことだよ」

そう言っでやると白い翼を生やしたまま、彼らの動きを解除してやる。襲撃はこない様子。

あとはここには用はないと思い、飛ばうとしていたがまた別の男が

現れた。

黒い髪に片目。派手な着物。キセルをくわえながらやってくる。この男は他の連中とは違う危険な匂いを感じた。

「なかなかおもしれえもん見れたなあ」

身長はそれほど高くないがとても闇を深く感じさせる男。少年は一発でわかった。

「お前が親玉か」

「ククツ。まあそんなもんだ」

不気味に笑っている異様な雰囲気をだす片目の男はまさに闇そのものの。

「ここにそんな力持つてる人間なんざいねえ。それに天人にもそんな奴はいねえだろうよ」

「おっ、信じてくれんのか？」

「ああいいぜ。それに気に入った」

少年は理解ある男に喜んだが、次の言葉で不機嫌になった。

「俺と組んでこの腐った世界をぶっ壊さねえか？」

録にこの世界を知らない人間に勧誘してきたのだ。

「ああん？何でそんなことしなきゃいけないだよ」

眉間にしわ寄せて、睨む。

「てめえが俺と同じ匂いがするからよ。闇に潜んで血を浴びる獣だよ」

クククと笑うその姿は邪気と同じで、しかも何気に当たっている。

ただ違うのはこの男との違いはある。

「まっ確かに俺は闇に潜んだ悪党だ。だが、お前とは違う。別に破壊を楽しむほど狂っちゃあいねえ。俺は守るべきものを守るために悪党になった。ただ、それだけだ」

守るものがあるかどうか目の前の人間を見てはつきりとわかる。

「たしかに、違うな。俺に守るもんなんてありやしねえ。俺の獣の呻きが止まる時は、すべてぶっ壊れた後だ」

守るためになつた悪党とすべて壊すためになつた悪党。

二人の悪党の性質はまったくもって逆だった。

「それにしても俺が来たってことは、あいつらも来てる可能性が高いし、いつまでもここで喋ってる暇はねえ」

今度こそじゃあなと言って飛び去っていく。

それを見て男は

「ククク、クハハハハ！楽しくなりそうだなあ。あいつまで死んで丁度退屈してたところだったんだよ」

「超能力……か」

「また派手な祭が起きそうだ……まっあの世で見てろよ江戸が血に染まる瞬間をよお。なあ」

「

」

夜空を眺めていつまでも笑う姿は部下でもゾクリと怯えるものがあった。

キセルを吹いて部屋に戻っていつてもツンツン頭と金髪の女ですら一歩もその場が動けなかった。

1、悪党は悪党でも性質は違う（後書き）

垣根と鬼兵隊の場面でした。

ってことで江戸編やっちゃいました。

2、目が覚めたら懐かしい雰囲気なのは誰だってびっくりする（前書き）

ちよつと更新

2、目が覚めたら懐かしい雰囲気なのは誰だってびっくりする

黒い独特のラインが入ったTシャツにジーパンを入った身長が結構高い白髪の少年は戸惑っていた。

目の前にはもう会えないとばかりに思っていた二人の人物が不審そうに自分を見ている。

（目を覚ましたらここは前にいた万事屋でしたとかつて冗談とか程にもあんだろオガアアアア！！！！）

ダラダラと冷や汗をかいて心中叫んだ。

（それにしてもあれだな。こっちは十年以上たったつつうのに何も変わらねエンだな）

冷や汗を掻きながらもそんなことを思っているとチャイナ服着た少女が傘をコチラに向けた。

「お前誰ネ？」

（神楽……………）

敵意剥き出しで睨むその姿は銀時にとって悲しいが、今は一方通行なのだ。

「……………っ、俺だって何が何だか知らねエよ。気付いたらここにいたし、テメエら変な格好してるし」

敗れてごまかした。ここで銀時だってカミングアウトしたって二人を困惑させるだけだ。

「まア、オマエ呼ばわりはさすがに気分ワリイからよ、一方通行アクセラレータて呼んでくれや。それが俺の名前だ」

このままじゃ拉致が開かないため、能力名を名乗る。

神楽はまだ警戒しているがもう一人はそれを見ながら苦笑していた。

「そうですか。僕は志村新八と言います」

新八と名乗った少年は銀時が持っていた木刀を腰にかけていた。

「……神楽ネ」

それに続いて警戒しながらしぶしぶ名乗ると銀時は

「そんな警戒したってナンもしねエよ」

一瞬悲しそう顔をしたがすぐに元に戻し、呆れたように答える。

（それにしても、何でまたここにいるンだよ？何のその前フリもな
くよ）

銀時は考えていた。何故急にこの時代に戻ってきた事を。

（今回、仙人は出て来なかったが……）

（これを知ってンのは木原ぐらいしか……！！）

ここで何かに気付いた。何故木原が知っているのかも。

（あいつは上に関わりがある見てエだから）

「……………まさかねエ」

上の連中でコレを知っているのは大体、限られているし銀時が想像したのは一人。

眉を潜めて顔を歪ませていると

「あ、あの？アクセラレータさん？どうかしたんですか？」

新八がよそよそしく声をかけてきた。

「あア？」

考えている最中だったため顔はそのまま新八に向けた。「ひいつ！」と小さな悲鳴を上げて怯えてしまった。今の銀時の顔はただでさえ悪党面なのだから無理もない。

「何でもねエ……………わりイな。考え事してたもんで」

一言詫びてスクツと立ち上がってここから出ようとする。

「待つネ！」

神楽が銀時を呼び止める。

「お前から……………銀ちゃんと同じ匂いをするのは何でアルか…？」

そこで体が一步も動けない錯覚に落ちた。

新八は「え？」と混乱している様子。

神楽は本能で感じているのだろう。まだ銀時の背中に傘を向けているが、銀時は振り向かない。むしろ、今重たい足で玄関に向かうとしている。

「答えるヨ！！何も関係ないなら答えるアル！！！」

今にも泣きそうな神楽の叫びに銀時は今にでも抱きしめたい衝動に陥り始めている。

そうなってしまうてはもう駄目だった。振り向いて抱きしめようとする矢先だった。

何やら外が騒がしいのに気づくと、気を紛らわすために急いで外に出る。

二人もそれを見て慌てて追っていく。

見たのはパトカーが人間に追いつけないという面白い光景。

銀時は驚愕していた。

聞き覚えのある怒号はいい。問題は追われている女性。ここじゃ出会った事がない姿があったからだ。

「だあかあああああ！！テロリストでも何でも無いっつてんでしょうがあああああ！！！」

女性はこちらに気付いてなく逃げるのに必死だった。

銀時はどうやって彼女が逃げているのかを知っている。

原子をターボ代わりにして走ってるのだ。

銀時は頭を押さえて何か吹っ切れたようにそれに向かって叫んだ。

「止まれエエエエ！！麦野オ！！」

麦野と呼ばれた少女はそれに反応してそちらに向くとピタリと停止して

「銀時iiiiiiii！！！！」

そう叫びながら飛び込んできた。

「待て待て待て！！原子纏いながら飛び込んでくんなアアアア！！！！」

演算する暇もなく麦野が銀時にそのまま体当たりして地面に倒れた。

「銀時！ここどこなのよ！？わけわかんないし！！垣根はっ！？！？いないの！？」

銀時の上で暴れる麦野に対して銀時は顔をしかめる。

「いてエし、重たいんだから降りろや！！お前太っ」

ゴシヤアアアア！！

どうやら余計なことまでいったらしい。麦野の右手によって地面に

減り込んだ。

「汚物は排除ってね」

立ち上がってパンパンと服を払うと銀時の近くいた二人が麦野に近づいてきた。

「この人の事の名前ってアクセラレータさんじゃないんですか？」

絶賛気絶中の銀時を指しながら新八は聞く。

「ん？それは能力名よ。超能力知らないの？」

「超能力……？」

新八が首をかしげて神楽は怪訝そうな顔している。

「まあいいや。こいつの本名は坂田銀時だよ。何で能力名を名乗ったかは知らないけど」

麦野がそう言った瞬間、パトカーから出てきた隊員やその二人は固まった。信じられない顔している。

そもそも銀時なんて珍しい名前はいないだろう。

麦野は

「あれ？なんでそんな顔してんの？こいつを知ってたり？」

キョトンとしている。

そうしているうちにパトカーから更に三人が出てくる。

「どういつことが説明してくれないか？」

先程の会話が聞こえてきたのか尋ねてきた。

尋ねてきたのはゴリラ顔の男。

「は？」

頭に？をつけた麦野はわからなかった。

「そっからは俺が説明してやらア」

いつの間にか起きたのか地面に座っている銀時。

「久しぶり。てかこの顔じゃア、初めましてだな。ゴリラ、大串くん、総一郎くん」

「ここでは『万事屋銀ちゃん』なんて自営業やってましたがア」

「今は学園都市第一位やってる『一方通行』こと坂田銀時でエす。よろしくな」

ニヤリと意地悪い顔して銀時は顔馴染みのある三人に挨拶をした。

2、目が覚めたら懐かしい雰囲気なのは誰だっ**て**びっくりする（後書き）

これで超能力三人登場しましたね。

次はちょっと科学サイドから始まります。

3、あっさり信用するのはお人よしすぎるもんだ（前書き）

科学サイドからです。

3、あっさり信用するのはお人よしすぎるもんだ

科学サイド

学園都市伝説となっている不気味にそびえ立つ窓のないビルに巨大な培養機の中に逆さまに入っているのがいた。

アレイスターIIクロウリー。

学園都市の統括理事長である彼とも彼女とも呼べない実体はモニタ
ーを見て鮮やかに笑っている。

映っているのは慌ただしく動く同じ理事会の連中と、リーダーの失った組織の行動。

そして全学区に流れ出しているニュース。

第一位、二位、四位の消失

これに対して彼らに関わっていた、光の連中も戸惑いを隠せていない。

主に幻想殺しや超電磁砲、それに学園都市に残っている妹達システムズは搜索に専念している。

そこで邪魔が入る。

「アレスタああああ……! どういうことだこりゃあ! ?」

金髪に白衣、顔面に青刺の男が怒鳴りながら入ってくる。

彼にもその映っているモニターが見えている。

「あいつらに何かしたとなればオメーぐれえしかないだろうが！
！自ら学園都市の要を手放して何がしたいんだ！？」

今にも殺したくなる衝動を押さえ、睨むだけで我慢する。

「まあ少しは落ち着いたらどうだ木原数多。これはちょっとしたゲームだよ」

「ゲーム…だと？」

金髪の男、木原数多は目の前にいる理事長の言葉に更に不信感を表す。

「坂田銀時。彼の素性は知っている君ならば、ここまで言えば私が何かしたのは言うまでもないだろ？それに学園都市はそれほど脆くはない」

そこで嫌でも理解せざるを負えない。

木原にとってはこれほど嫌なものはなかった。

「テメエ……そのためにあの二人まで飛ばしたのか…？」

「フフフ……いずれは必ずばれる。ならば、早いほうがいいだろう？それに私のプランに支障はでない」

「あくまで私のプランは坂田銀時によって成立するものなのだから」

ニヤリと笑う姿はどこまでも悍ましいものだった。

木原は拳を握りしめてアレイスターを見て狂ってると思えなかった。

「どこまでもぶっ飛んでやがんなあアレイスター！ テメエが憎くて仕方ねえ」

歯をギリギリ噛み締めながら木原は苦しまぎれに話す。

「問題ない。リスクは大きいが問題ないのだよ。代わりと言ってはなんだが、用意してあるからね。彼らと対等、もしくはそれ以上のものを」

「何…？」

そこで新たに場面が変わる。

「な、なんだよ……こりゃあ……！？」

木原は驚愕よりも恐怖が見栄えた。

それをみてこれ以上言葉を発することはできなかった。

彼が見たものは………

（江戸サイド）

場所は変わって武装警察”真撰組”屯所。

一つの広い部屋。彼らが会議に使っている場所に近藤、土方、沖田を始めとする隊員達が座っている。

そして神楽に新八、この時代とは場違いな服装をしている銀時、麦野がいた。

銀時の隣に座っている麦野は彼を見て違和感を感じた。

（あれ？）

感じたのは銀時の首筋にあるものべきものがない。

「銀時。あんた何でチョーカー失くなってんの？」

「ああ？……そ言えばねえな。普通に動けるし、能力は……今使ったらまじイよな」

「そんな状況じゃないしね」

チョーカー。あの世界では脳に障害を受けて、妹達によるミサカネネットワークでの援助がなければ能力は疎か、話すことも動くこともできない。

それがなくとも普通に動けたり話せたりするのだ。銀時も今漸く気づいた。

ちなみに二人は周りに聞こえないように小さな声で話している。

「おい」

鋭い声が二人の耳に入った。

「聞かせてもらおうか。何でお前が万事屋を知ってるのか、お前がその名前を名乗っているのか全部な」

土方は鋭い目線で冷たく言い放つ。

「そうね、あんた隠し事いくつか私や垣根にしてるでしょ？今こゝで話してもらおうかにゃーん？」

隣の麦野からも目線が痛いほど感じる。

「そのつもりなんですウ。そんなピリピリすんなよ？」

銀時はため息を一つ。それから怠そうな目で周りを見た。

そして

「お前らが知ってる坂田銀時が突然死んだのはわかってるよな？」

「！？」

確信から話すと全員は頷く。ただ一人麦野は驚愕している。

まっ当然の反応だなと銀時は予想はついていたため落ち着いている。

「何のために俺を選んだのか知らねエが、どっかのクソ野郎（仙人）がその魂を別世界の人間」

自分で指を指してから

「信じられねエ話しだろオが、このアクセラレータって奴に憑依したって訳だ」

この体に憑依したことを告げる。

全員が押し黙る。まるで夢物語でも聞かされているようなものだ。

別世界、憑依。現実的に有り得る事ではない。

「せつかくだからテメエらにも隠してたことを今ここで、バラしてやらア」

沈黙の中、銀時がまた話し出すと視線を向けてきた。

「攘夷戦争……俺は桂と高杉とともに最前線で戦っていた」

それを聞いた近藤、土方、沖田含め隊員達は固まった。

神楽、新八は知ってるため黙ったまま見つめているが麦野は

「攘夷…戦争…？」

初めて聞く言葉に動揺している。

「天人から国を護るために取った刀が今じゃ、そいつらに支配されて、戦った俺達はテロリストだのと反乱分子ときた」

「それでもこのクソツタレた世界で俺達は生きてきたんだよ」

「上に言われて動くお前らとは違うんだよ。正直、戦争を知らねエ テメエらが攘夷志士をしょっぱいてのが腹わた煮え返るほどム力 ついて仕方がねエ」

これほどまで銀時が怒りを表してるのを初めてみた。

真撰組も神楽、新八、麦野は銀時の冷静に話す姿からその怒りを感じさせられた。

「まア丁度いいや。攘夷戦争後半……耳にした事あんだろ？」白夜叉『ってな」

それにピクツと一番早く反応したのは以外にも隣にいた麦野だった。が何も言わない。銀時の口から明かされるのを待っている。

「……………こんなことを書いてあつた資料があつた」

近藤が重々しく口を開く。

「敵からも味方からも恐れられた伝説の武神」

それだけだと言う近藤に銀時は横に首を振る。

「それだけじゃねエな。こう言つてた奴のほうが多い。銀色の髪に血を浴び、戦場を駆ける姿は、まさしく夜叉ってな」

「ずっとテメエらの近くに敵である白夜叉がいたんだよ。ずっと一

緒にな」

こんなもんだな、そういった感じで銀時は一息入れる。

「これが俺……いや、お前らといた坂田銀時だ。わかってくれたか？」

話し終えた銀時は静かに見つめる。

「じゃあ……」

沖田が苦し紛れに声を上げる。

「旦那は……ずっと騙していたって事なんですかい？」

沖田の目が銀時をとらえる。

「……そオなのかもしれねエな。けどよ、何でかな。テメエなりに護ろうとすンのを見てつとどオでも良くなつてたんだよ」

フツと笑って答える。

「お前らといると桂や高杉ら仲間を思い出すんだよ。馬鹿みてエにハシヤいで、馬鹿みてエに真っ直ぐなところがよ……つい手を貸しちゃまう。だからテメエらを殺そうとは思えなかった」

素直に思っていたことを打ち明けた銀時は優しく笑っている。

「信じるかどうかはお前ら次第さ。今思えば英雄なんて称えられるほどのモンじゃねエ。言ってみれば、今も昔も変わらねエ殺人鬼とした悪党だ」

「そんな悪党が消えた。そのだけのことだ」

今となつては過去の話だ。この世界の自分はもういない。だからと言つて『一方通行』となつて生まれ変わった自分がここで深く関わる必要はない。

しかし、それを許さない人間もいる。

「信用するさ」

その言葉に驚いて銀時は近藤を見る。
それだけじゃない全員が一斉に銀時を見つめている。

「お前が敵で白夜叉だったとしても、俺達を幾度も助けてくれた。何度もこの町を救ってきたじゃないか。それだけで十分、信用できる」

「借りは返してねえし気に入らなかったが感謝してんだよ」

「旦那……今のあんたは高杉より悪党面してますけど旦那は旦那。見た目は違えど宿している魂は変わってないはずですぜい」

土方、沖田も続くと隊士達も納得する。

銀時は堪えられなかったのか目線を下に落とす。

「お気楽連中だなア……つたく、三下共のくせによ」

誰にも聞こえないように呟くが麦野には聞こえていた。

「訳わからん時代に飛ばされてこんな話聞かされるとはねえ。でもあんたがここにいたことも、その体に取り付いてんのは認めざる負えないでしょ。それにあんたさあ、こんなに慕われてんなら少しは素直になったらどうなの」

その性格じゃあ無理そうだけどと麦野が茶化すと、うるせエと返す。

顔を上げて照れたように

「まア……なんだ…感謝するぜ」

頭を掻いた。

すると神楽がスクツと立ち上がった。

「本当に銀ちゃんなのはわかったネ……だから今の銀ちゃんの実力で私と勝負するアル!!」

ガチャと傘を向けて挑発する。

「オイオイ……ここは穏やかで終わるもんだろ？」

銀時は少し引きながら呟く。

しかし、新八の

「逃げるんですか？銀さん？」

一言でガラリと雰囲気が変わった。

長年いた麦野は

「あららららあ、あの子どうなっても知らないよ」

苦笑していた。

「逃げる?……ククツ馬鹿言ってンじゃねエよ。喧嘩売ったのはそ
っちだ。どオなつても知らねエぞ、神楽」

さつきとは違い、テンション上がり気味に笑う。

「望むとこネ! 銀ちゃんとは本気で戦ってみたいと思つてたアル!」

神楽もニヤリと笑う。

それを見てまたテンションが上がった。
コキコキと首を鳴らして立ち上がる。

「新八君、木刀借りるぜ?」

「はい」

新八から木刀を受け取ると

「久しぶりに最っ高に楽しくなりそオだなア」

銀時もまたニヤリと笑って返した。

3、あっさり信用するのはお人よしすぎるもんだ（後書き）

もう一つの『とある侍』とは銀時の性格が変わってるのでそこそこはご了承を。

4、喧嘩を売るのは程々に（前書き）

銀時VS神楽です

4、喧嘩を売るのは程々に

場所は真撰組屯所の外。

意外と広い庭には神楽と銀時。

そして麦野から言われて少し離れて見る新八と真撰組一同。

「あの、何でそんなに離れるんですか？」

新八は素朴な疑問を麦野にぶつける。他も同じ様子である。

「ああ、あいつテンション上がる何するかわかんないから。それに能力使うと思うし」

何の変哲もなく麦野は答える。長年の付き合いが淡々としている。

「本当に何なんですかそれ？」

「まあ見てればわかるさ。どういうもんか」

麦野はこれから始まる戦いに目をやったまま答える。
その先にはお互い睨み合う二人の姿。

「さて、そろそろ始めよオじゃねエか、神楽ア？」

「こっちはいつでもOKアル!!」

「そオかい。ンじゃ」

トン、と足に力を入れて踏み込むとビュンと一瞬にして神楽の目の前に飛び込んだ。

「愉快に素敵なスクラップにならねエよオに氣イつけろよオ!!!」

ブン、と迅速に木刀を振り下ろす銀時に神楽はとっさに傘を盾に防ぐ。

神楽は銀時のあまりの速さに飛び引く暇が無かったのだ。

力を最大限にして振り払おうとするが、それができない。逆にドン押し込まれていく。

「くっ!」

ギリギリと音を立てて軋む傘と木刀。

「オーオー、どオしたア? 神楽ちゃん? 天人でも最強に入る種族であるお前がこんな人間様に押し負けてンぜ?」

ニヤリと笑って余裕を示す銀時は挑発する。

「う、るさいネ!!!」

更にグツと力を入れるが、

「!?!?!」

現状は変わらなかった。むしろ力を入れると同時に押し込まれていくのだ。

「わからねエよな？だが、俺は神楽が力を入れてるのはヒシヒシと伝わってくるぜ」

クククと悪党のように笑う。

「一つ、教えてやる」

まるで悪戯でも成功したかのように話す。

「単純に考えれば、それ以上の力で俺はお前を押し込んできると思うだろオナ」

「そオじゃねエンだよ。お前やあいつらはそオ思うが違うンだよ。俺はただお前の力の向き（ベクトル）をお前自身に返してンのと更に俺が力をそちに向けてるだけさ。まア反射ってわけだ。だからなンば力を入れよオとも疲れるだけだぜ？だから」

神楽は銀時が言っていることが理解できない。普通の人間はできるはずがない。むしろ、夜兎族や他の種族でもできるもんでもない。しかし、混乱している暇はない。グツと力を入れ込まれたのだ。耐えられるかわからないほどに。

そして

「ふっ 飛べ、コラ」

振り抜かれて神楽の身体は凄まじい勢いで吹っ飛び、壁に激突した。

「まっ お前の力を反射してンのに簡単に吹き飛ばせねエのは、さす

が夜兔つてどこか？」

ふう、と一息入れて崩れ落ちた壁のほうを見る。

するとガラツと音を立てると

ダダダダダッ！！と傘から放たれた銃弾は銀時に向かっていったが、ニヤリと笑って何も構えない。

神楽はそれを見て驚く。

「早く避けるアル！？」

予想外の展開に動揺するが、すでに放ったものは銀時に当たっていた。

その瞬間だった。

「なっ……………！？」

その当たった銃弾がそのまま神楽のもとへ返っていった。突然のことに反応できないため肩や足にかすり傷程度に当たった。

「あれじゃわからねエだろオから反射つてもンを教えてやったぜ。まア少しの傷程度で納まるように操作してやったけど」

そのまま返して当たったらお前でもきつかっただろオな。とニヤニヤと憎たらしい顔をしている。

「俺の能力はベクトル操作つつてな。大気や熱量、おまけに人の

血液の流れだってできる。まアあらゆる殆どの向きを自在に操作することが出来る」

ここで少しネタばらしをして、あちらの状況も話し出す。

「俺が今いんのは学園都市つつつてな。超能力の開発や科学が発展しているところだ。それに殆どが学生で占めている。それを餌に研究員どもはその超能力を植え付けさせようとしてるわけだ。誰もが持てる超能力があるとは限らねエ。超能力にもレベルがある。0～5、つまり得られなかった無能力者（レベル0）だってわんさかいるし、自力で頑張って地道にレベル上げてる能力者だっている」

「俺は研究員どもにいじられた結果、最初っからレベルMAXである超能力者（レベル5）になっていた」

「麦野：それに垣根って奴も同じだ」

周りに聞こえるように銀時は話し掛ける。先程の戦闘から固まるばかりだった。

麦野は銀時を見つめて黙っている。

そこでハッとして銀時は今の状況に戻る。

「おっと余計なとこまでドンドン言っちゃまいそだったぜ」

危ねエ、危ねエと呟きながら神楽を見る。

「あア、反射つつつても絶対的な防御性だってわけじゃねエ」

反射を貰ける二人を思い出して笑みをこぼす。

「例えば、俺の設定してある反射膜に入る直前に拳を引き戻すことができる。そんな荒業ができればダメージが与えることができる」

「出来る奴なんてのはそオそオいねエけどな」

そう言ったあとまた足を踏み込むと今度はピキピキと地割れのように地面が割れ、その断片が神楽へと襲いかかる。

神楽は動かない。目を閉じて集中しているようにも見えない。

断片が目の前にきた時によやく開けると一瞬で振り払うと負けじと凄い速さで銀時に迫ると

「わかったネ」

そう呟くと拳を顔面に打ち込んだ。

「ぶっ!？」

バキッという音がして銀時が吹っ飛んだ。

「ベラベラと喋りすぎたアルな。私は腐っても夜兎ネ。戦闘に関しては頭ののめり込みが早いのは銀ちゃんにはわかってたはずヨ」

戦闘に関しては嫌でもずば抜けている神楽はその情報が必要だと思えば取り入るし、身体能力だって銀時には負けてはいない。それをいかしたら彼が言っていた反射を貫けることができたのだ。

「ククッ……あはっははははははは、ぎゃははははは、くきゃき

やきやきや……………！！！そオだよなア？そオじゃねエと面白みが足りねエ」

スクツと立ち上がった銀時はおかしそうに笑った後、満足した顔をしている。

「どオやら俺はお前を完封なきまで叩き潰さなきゃ氣イ済まないらしい」

「私も同じネ。それ以外ないアル」

お互いにニヤリと笑って傘と木刀を持ち直す。

「第二ラウンド開始ってなア！」

銀時が叫んだのを同時に突っ込む。

これは誰が見ても普通の力の見せ合いではなく、戦場での殺し合いに見えた。

4、喧嘩を売るのは程々に（後書き）

もうちょい続きます。

てかこれもう銀時じゃねエ

5、**暴れたなら片付けはきちんとしよう（前書き）**

続きと

垣根くんの登場です

5、暴れたなら片付けはきちんとしよう

垣根は歌舞伎町で歩き回っていた。

一つ思ったことは

（まじで何でもありな世界になってんな）

空飛ぶ船や様々な宇宙船などが空を少しばかり覆っているし、畏敬な形をした人間とは言えない物体が二足歩行でうじゃうじゃいるフアンタジーな世界だと垣根は思った。

あまりにも非現実的な光景に笑ってしまっていた。

（あれが天人ねえ……………）

情報が集めた結果わかったのは

（約二十年前の天人の襲撃、攘夷戦争……………不条理な条約での天人の勝利と侍の衰退、今じゃ国のために戦った攘夷志士の処分……………か）
あまりにいかれた街だということだ。

「どこも上の連中つてのはヘタレな馬鹿野郎しかいねえのかねえ」

垣根はくだらなそうに歌舞伎町を見渡した。

「まずは銀時達探さねえとな」

根拠はねえんだけど、と思いつながらだるそうに歩いていると

「貴様、今……銀時と言わなかったか？」

「あん？」

誰かに声をかけられて振り向くとそこには笠を深く被ったお坊さんのような人物がいた。

「誰だ？ テメエ？ 何で銀時を知ってやがる？」

垣根が怪訝な顔でその人物を見つめる。

「そんなことはいい。銀時とは……坂田銀時のことだろう？……アヤツは死んだんだ」

悲しみの満ちた声で発する男に垣根は驚愕した。

「……は？ 何言っただお前？」

わけがわからなかった。何でここで銀時が出てくるのか、死んだなどと出てくるのか。

「ならば、着いてくるといい。奴がいた居場所に。そこでハッキリするだろう」

そう言っつて男は歩きだす。垣根は内心、困惑しながらも着いていくことにした。

「くそつたれ、何なんだよ一体？ 銀時…… テメエは何者なんだよ……」

そして思わず、今までずっと家族として過ごしたあの白髪の少年に悪態をついた。

「ぎやはっ！ホラア！！物足りねエぞ神楽ア！？酸昆布切れになっちまったかア！？」

「うつさいネ！！お前こそ銀ちゃんなら、糖分切れてんじゃないアルか！！この糖尿病寸前マダオが！！」

「残念でしたア！ちなみに今の銀さんはブラックコーヒーも飲める両刀使いなんですウ。それに俺の能力にかければそんなン気にする事ないンですウ」

「だったら一生それに埋もれてるヨ、クソチート野郎が！！」

「説明一つで俺をぶん殴れるお前も十分、チートだと思うンですがねエ！！！！」

爆発音、破壊音が聞こえるなど激しい戦闘の中でまったくもって関係のない会話が聞こえてくる。

荒れた真撰組頓所を見ても、近藤達は止めることもできずにあぐり口を開けたまま悲惨な状況を見つめている。もし止めに入れば死ぬという言葉がでないスケールを越えた戦いになっているのが誰でもわかる。

「へえゝあの子やるじゃん？銀時の聞こえてたんだけど天人っての

は見かけに寄らず、すごいよね」

麦野が神楽の戦闘を見て褒めている。

だが麦野は知っている神楽は余裕がないのに対して銀時は俄然余裕を持っていることを。

「例え銀時に攻撃できても攻略にはならない。あいつは私よりもいくつもの戦闘パターンを把握して頭の中で想像して組み立てるのが尋常じゃないくらいできる。そのくらい頭の回転は速い」

「あの子は銀時に勝てない。絶対に」

するとまた一つ、ドオオオン！！と騒音が響く。

その騒音に目を向けると部屋に吹っ飛んだ先に倒れている神楽と、ニヤニヤと笑って見つめる銀時がいた。

ここまで差があるのかと誰もが騒然としている。

銀時と言う男は前も掴みどころがなく、強い魂を持ち、誰よりも強かった。

その銀時が自分達の知らない少年の姿で、更には得体の知らない強力な力を持ってここに現れた。

ただでさえ届きそうになかったのにまた遠く感じるようになり銀時を知ってる全員は恐怖を覚えた。

その事を知らない銀時は倒れている神楽に声をかける。

「神楽よオ、いくら俺に攻撃出来たとしてもよ……ワンパターンでやるオって考えはねエだろ」

呆れたようにゆっくりと立ち上がる神楽を見つめる。

「もし、本気でそオ思つてンなら、抱きしめたくなくなるくらい哀れだな」

ハアとため息を吐き出すと一瞬で背中に竜巻のような翼を生やして神楽の元へ突っ込み右の拳を向ける。

神楽はいくら夜兎とは言え、ダメージが大きく、ふらつきながら傘で防ごうとするが

バキンと傘が壊れる音が響いた。ベクトル操作で拳の威力をそれくらいまでできる程の力を設定していたからだ。

彼女にもう防ぐ物はなく、まったくの無防備。

銀時は更に拳の力を調整する。

「こつから先は一方通行だ。俺とマジに殺り合いてエなら、足りねエ頭でもつと捻つてから出直しやがれ!!」

ゴッ!!と顔面に鈍い音が届いた後、そのまま更に彼女の体は吹っ飛ぶ。

「っ……………」

あまりの衝撃に言葉も出ず、神楽は倒れたまま意識を手放した。

「あー…………ちつとやり過ぎちまったか？」

気絶している神楽を離れたところから見つめてだるそうに言った。

「戦闘種族だか何だか知らないけど、さすがにやりすぎなんじゃない？最後のアレは駄目でしょ」

銀時の隣に割って入ってきた麦野に言われて、やっぱり？と目で伝えるところに頷かれた。

「それにしても…………こつから先は一方通行って…………くくっ！洒落か何かなの？」

笑い堪えている麦野にしかめながら

「うるせエよ。何か知らんが、そオというのが頭に浮かんできたただだ」

今にも爆発しそうな麦野を無視し、ポカンとしているギャラリーを見て改めて悲惨な光景に苦笑した。

「わりイな、こんなボロボロにしまつて。責任持つて俺がちゃっちやと修理すつからよオ」

「……………ああ」

申し訳なさそうな顔で謝る銀時に近藤はまだ呆然としなら頷くだけだった。

それを苦笑しながら神楽を彼らのほうに渡して作業を始めた銀時。

麦野もそれを手伝いながらからかう。

二人が楽しそうにも見える姿に何とも言えない顔を彼らはしていた。

5、**暴れたなら片付けはきちんとしよう**(後書き)

銀時VS神楽はひとまず終了です。

何かあれば何でもござれ!!

6、天使？いいえ。ただの目立ちたがりなメルヘン君です（前書き）

やっぱりていとくんはいいキャラだと思います（笑）

6、天使？いいえ。ただの目立ちたがりなメルヘン君です

垣根は網笠を深く被った人物とともに、ある建物に辿り着いた。

まず見えたのはスナックお登勢と言う看板。

「こんな所にスナックなんて店あんだな」

へえと少し興味を示していると男が話しかけてくる。

「上を見てみる」

くいつと男は顎で上げると垣根はそれを見る。

「万事屋銀ちゃん？」

スナックの2階にはでかかとそう書かれている看板があった。

「そう。そこが銀時の居場所だったとこだ。銀時がいた証」

男は段々と声を沈めながら、そう答えた。

「……………」

垣根は考えてはいるが、どう考えても嘘を言っているようには見えない。

チツと苛立ちながら見つめる。そして垣根は

「この場所が銀時の全てがわかるってえのか？」

本題に入ると男は頷く。

「ああ、そうだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9870w/>

とある侍の一方通行～江戸編～

2011年11月17日19時21分発行